

荒川放水路通水 100 周年記念事業における 広報の取り組みについて

崎岡 らける¹・渡辺 健一

¹関東地方整備局 荒川下流河川事務所 地域連携課 (〒115-0042 東京都北区志茂5-41-1)

荒川下流河川事務所は、2024年に荒川放水路が通水100周年を迎えることを契機に、これまで荒川に関わってきた全ての方々への感謝の意を表すとともに、これからも安心して暮らしている強靱で持続可能な地域としてより良い形で将来に引き継いでいくことを目指して、「荒川放水路通水100周年記念事業」を実施した。

本稿では、記念事業における広報の取り組みについて紹介する。

キーワード 荒川放水路、周年事業、地域連携、広報

1. はじめに

荒川は、埼玉県秩父山地の甲武信ヶ岳（標高 2,475m）を源とし、東京湾までを流れる幹川流路延長 173km、流域面積 2,940k m²の一級河川である。都幾川や越辺川、高麗川、入間川など多くの支川と合流しながら埼玉県中央部の平野を流下し、東京都区部と埼玉県の低地を流れ、東京都北区志茂で隅田川を分け出し、東京湾に注ぐ。中流部は日本一の川幅を有し、下流部は人工の放水路（荒川放水路）であることが大きな特徴である。

流域は、東京都と埼玉県にまたがり、流域内の人口は、約 1,020 万人にのぼり、その多くは、沖積低地、台地、丘陵に集中している。下流部は、人口や資産が集中していることから、日本の政治・経済の中核を支える重要な河川と言える。



図-1 荒川放水路の整備

(1) 荒川放水路の建設背景

かつての荒川は、その名のとおおり「荒ぶる川」として、江戸時代から明治時代にかけて沿川で洪水被害が頻発しており、特に大きな被害をもたらした 1910 年の洪水では、死者・行方不明者 399 人、浸水及び全半壊・流出戸数約 28 万戸の甚大な被害をもたらした。

この大洪水を契機に、明治政府が東京都北区岩淵の下流から中川の河口方面に向けて、延長 22km、幅約 500m の荒川放水路を建設することとなった。延長 22km にわたる放水路は、必要とされる用地も広大であり、移転を余儀なくされた住民は約 1,300 戸、民家や田畑をはじめ、鉄道や寺社も含まれた大規模なものであった。工事は地面が平らでない箇所については人手による人力掘削が主流で、その後蒸気掘削機による機械掘削や、機械掘削で取り除けない低水地は、浚渫船による掘削が行われた。工事中には何度も台風や高潮に見舞われ、1923 年関東大震災でも大きな被害を受けた。

この大規模な工事を乗り越え、1924 年に通水し、1930 年に荒川放水路は完成に至った。(図-1)

2. 荒川放水路通水100周年記念事業の概要

2024 年は、1924 年 10 月 12 日に執り行われた新荒川（荒川放水路）通水式から 100 周年を迎えた。通水 100 周年を契機に、地域住民を始めとする多様な主体が、荒川流域の未来像を考え、流域治水の重要性を広く啓発するとともに、河川と共に育んできた文化について考えるため「荒川放水路通水 100 周年記念事業(以下、記念事業)」を実施した。

具体的には、荒川下流部沿川 2 市 7 区(以下、2 市 7 区)【埼玉県 戸田市、川口市、東京都 板橋区、北区、足立区、葛飾区、墨田区、江戸川区、江東区】の首長

及び 東京都建設局長，埼玉県県土整備部長，荒川下流河川事務所長で構成される「荒川放水路通水 100 周年記念事業実行委員会(以下，実行委員会)」を立ち上げた。記念ロゴマークの公募や「荒川放水路通水 100 周年行動宣言」の発表をはじめ，市民団体等 13 団体で構成される「荒川放水路通水 100 周年市民実行委員会（以下，市民実行委員会）」などの関係者と連携した広報イベント等を実施した。

通水 100 周年の約 100 日前となる 2024 年 7 月 7 日は，カウントダウンフェスを荒川ロックゲート周辺（江戸川区・江東区）で開催した。河川敷において、『水辺で乾杯』や音楽ライブ，スカイランタンを夜空に浮かべ，多くの参加者が集まり，大盛況のうちに終了した。

100 年前に通水式が執り行われた同日となる 2024 年 10 月 12 日には，実行委員会メンバーによる意見交換会「荒川放水路サミット」及びアニバーサリーフェスを岩淵水門周辺（北区）で開催した。荒川知水資料館でのアモアカフェや特別展，河川敷周辺での各種体験型イベント，市民団体主催シンポジウム等，地域の皆さまと共に記念日を盛大に祝った。（図-2,3）



図-2 荒川放水路通水100周年記念事業実行委員会

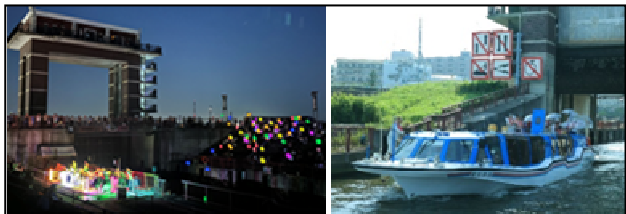


図-3 カウントダウンフェスの様子

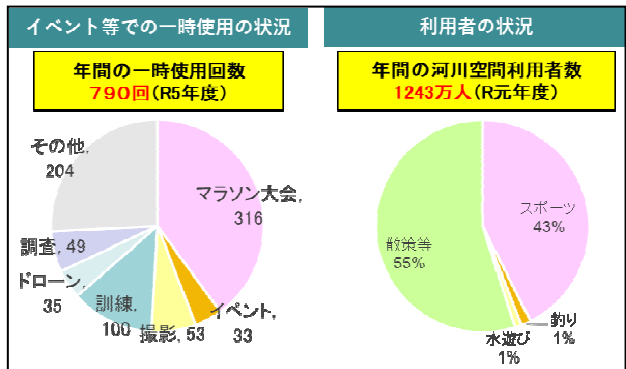


図-4 荒川下流部の河川敷の利用状況

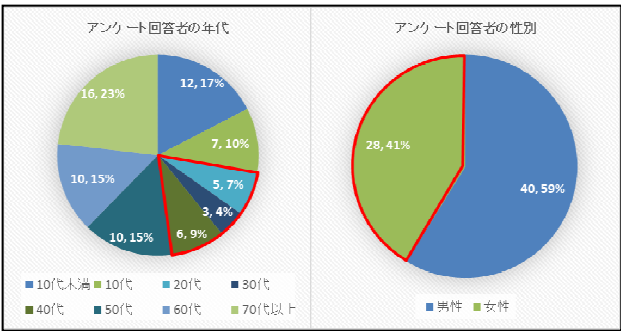


図-5 2023年度 荒川知水資料館アンケート回答者の年代・性別

3. 課題整理

荒川下流部は，都心における貴重なオープンスペースとして高度に利用が進んでおり，年間1,243万人に利用されている。多数のグラウンドや整備された緊急用河川敷道路があることで，多くの方に利用されているが，野球少年やサイクリスト，マラソンランナー等，スポーツの利用割合が大きく，そうした利用目的のためだけに荒川へ訪れていると考えられる。（図-4）荒川沿川に居住していても，荒川を訪れたことのない方（以下，非利用者）や，荒川が人の手で掘られた放水路であることを知らない方が多くいるのが現状である。

このような現状から，利用者には利用目的以外の荒川の魅力を知ってもらい，非利用者には荒川放水路への理解や認知度向上を目指し，広報展開を検討した。さらに非利用者に向けた広報展開では，（図-5）荒川知水資料館アンケート回答者の年代・性別より，回答割合が低く荒川への興味関心が薄いと考えられる20～40代の女性をターゲットに検討を行う。

また，本事業のキャッチコピーは「百年の想い 100年の未来」である。荒川にかかわる全てのひとへの感謝と荒川とまちをより良くするためにby allの精神で推進し，より魅力的な荒川放水路を目指すという想いが込められている。そのため，広報展開においても2市7区等の行政機関や市民団体と密に連携し取り組むこととした。

4. 広報の取り組み

(1) 情報発信（情報誌やSNSの活用）

本事業の取り組みや荒川放水路への理解や認知度向上について，広く浸透させるには，ある程度時間を要することから，通水 100 周年にあたる 2024 年 10 月 12 日の 1000 日前にあたる 2022 年 1 月 16 日より取り組みを開始した。（表-1）

表-1 主要な取り組みイベント

日付	イベント名
2022年1月16日	【1000日前イベント】 通水カウントダウンボード開設、岩淵水門見学会、水門ライトアップ
2022年8月27日	【777日前イベント】 1日事務所長体験会
2022年10月29日	岩淵水門100周年記念イベント
2023年2月18日	市民講座（みんなで取り組む流域治水）
2023年8月30日	「全日本中学生水の作文コンクール」受賞者イベント （1日事務所長体験会）
2023年10月11日	宮村忠文庫 開設
2024年7月7日	【100日前イベント】 カウントダウンフェス
2024年10月12日	荒川放水路サミット、アニバーサリーフェス

a) 情報誌の作成

荒川をより身近に感じていただけるように、荒川放水路の情報誌を制作した。掲載内容は、荒川放水路及び2市7区のお散歩コース、よりみちグルメ等を紹介するものである。情報誌のタイトルを『荒川放水路』とし、誌面にも荒川放水路建設の歴史について掲載することで、認知度向上を図った。(図-6)

情報誌のターゲット層は、前述した荒川への興味関心が薄いと考えられる20代～40代の女性をターゲットに据え、年代の近い荒川下流河川事務所の若手職員を中心とした編集部『ひやくねず』を立ち上げた。

ひやくねずでは、2市7区を5つのエリアに分け、エリア毎にチームを結成し、おすすめスポットやグルメ情報を自らの足で現地調査を行った。毎月2回程度、各チームの進捗状況やアイディアを募る編集会議を行い、若者視点の制作を行った。

制作した情報誌は、荒川知水資料館をはじめ、2市7区に設置している広報台、教育委員会や小学校へ配布を行った。小学校への配布は、ターゲット層の子供世代へ配布することでファミリー層の獲得を目指すものであった。

また、荒川知水資料館HPにてWEB公開することで、2市7区以外にお住まいの方にも閲覧できるような措置を講じた。



図-6 情報誌の作成、電子クイズラリーの実施

b) SNSの活用

前述の情報誌の発行と併せ、誌面で紹介したスポット巡ることができる『あなたも荒川放水路博士! クイズラリー』というLINEによる電子クイズラリーを開催した。対象スポットで出題されるクイズに正解するとスタンプが獲得でき、100スタンプ集めると激レア体験に応募できるクイズラリーである。激レア体験として岩淵水門操作体験や災害対策支援船あらかわ号の乗船体験を設定したことで、多くの参加を得た。(図-6)

また、若年層をターゲットに荒川下流河川事務所公式X(旧Twitter)を活用した広報を展開した。沿川自治体や関係機関、主催イベント参加者協力の下、2024年10月12日の100日前よりカウントダウン投稿を実施した。(図-7) 12日前からは荒川放水路通水100周年記念事業実行委員会がカウントダウンを行い、SNS上でも連携を図った。2024年7月7日及び10月12日の記念イベント開催当日においてもイベント内容の情報発信を適時に行った。

LINEやX以外では、荒川下流河川事務所公式Youtubeにおいて、2市7区の首長より、荒川放水路への想いや感謝の気持ち等コメントをいただき、動画公開した。

(2) 地域連携（自治体・市民団体・博物館等と連携した広報活動）

2市7区が主催するイベント(花火大会等)や自治体広報誌等において、「荒川放水路通水100周年記念」の冠とロゴマークを付けてもらうとともに、イベントチラシや自治体広報誌に荒川の歴史に関する紹介文を掲載する等、2市7区の協力の下、事業の認知度を向上させた。

行政のほかにも、市民実行委員会が結成され、広報やイベント活動について協力支援を図った。

北区飛鳥山博物館、江東区中川船番所資料館、埼玉県立川の博物館において、通水100周年の特別展や現場見学会、出前講座が開催された。また、2市7区、図書館、生涯学習センターの広報ブースにおいて100周年パネルリレー展が開催した。加えて2市7区のイベント情報を掲載する『荒川放水路イベントカレンダー』を発行する等して、地域一体となった広報活動を行った。(図-8)



図-7 カウントダウン投稿



図-8 区報掲載、100周年パネルリレー展

5. 広報効果

(1)取り組みの結果

荒川放水路通水100周年記念イベントでは多くの来場があった。カウントダウンフェスでは約6,000人、アニバーサリーフェスでは約8,000人と絶大な広報効果となった。

荒川の広報施設である荒川知水資料館amoaの来館者数は、昨年と比較して約1.3倍の来場者数となった。特にアニバーサリーフェスを開催した2024年10月は、過去7年の中でも最高の来館者数（月別）を記録した。

情報誌の配布部数は、1年間で約2万1,000部を突破し、荒川知水資料館amoaで配布している各種パンフレットの配布部数と比較しても、約10倍の部数にあたる。

2市7区が主催するイベント（花火大会等）や自治体広報誌等においては、(表-2)のとおり連携効果を得た。広報媒体の提供や取材への協力することで、イベントや自治体広報誌等で紹介して貰う等、コストを抑えつつも高い集客性や広報効果を発揮した。その中でも、通水100周年を特集した「あだち広報」2024年10月10日号は、東京都広報コンクール【広報紙部門】において、最も上位である最優秀賞を受賞し、全国大会である「全国広報コンクール」に都代表として推薦された。

また、広報の取り組みの結果、多くのマスメディアにおいて記事や特集として取り上げられた。(表-2)

(2)副次的な効果

荒川放水路開削工事時に建造された旧岩淵水門（通称「赤水門」）が、2024年8月15日付けで、国の重要文化財に指定された。通水100周年の記念すべき年に重要文化財に指定されたことから、高い注目が集まり、荒川放水路の歴史と併せてマスコミ等に大きく取り上げられる結果となり、相乗効果を発揮した。

表-2 自治体との連携効果、メディア報道事例

＜自治体との連携効果＞	
【広報】	
・江戸川新聞	発行部数 約19万部（新聞折り込み）
・北区報	発行部数 約19万部（全戸配布）
・足立区報	発行部数 36万2,400部（全戸配布）
【イベント】	
・第71回江戸川花火大会 Sky Fantasia	観覧者数 45万人
・第65回いたばし花火大会	観覧者数 57万人
・北区花火大会2024 RED×BLUE SPARKLE GATE	来場者数 4万3,000人
・第34回川口市花火大会	来場者数 7万8,000人
＜アニバーサリーフェス開催時の主要メディアによる報道事例＞	
NHKサタデー・フットボール	NHK全国ネットで約5分30秒放送(10月12日)
NHK首都圏NEWS	: 約9分放送(10月16日)
NHK首都圏NEWS	: 約2分放送(10月12日)
その他、朝日新聞や読売新聞電子版ほか、多数のメディアにおいて関連記事が掲載される。	

6. おわりに

筆者は4. (1) 情報発信（広報誌やSNSの活用）で述べたひやつくねんずの編集長を務めた。企画編集を通して、荒川下流河川事務所の若手職員が一丸となって企画に取り組み、その結果大変多くの方に情報誌を手にとってもらえたことを、大変誇らしく思う。この取り組みは、若手職員のコミュニケーション増加につながり、雰囲気の良い職場作りにも貢献したと考える。

今後の記念事業について、キャッチコピーにあるとおり、100年の未来について考えていきたい。事業開始と同時に始まった取り組みに、「水門ライトアップ」があり、毎月12日の夜、旧岩淵水門及び岩淵水門をライトアップするものである。荒川放水路の象徴である両水門のライトアップは、荒川放水路が今後も地域全体を見守り照らし続けるという想いを込めて、継承していく予定である。

最後に、これからも荒川放水路が多くの人々の憩いと安らぎの場として、地域の発展を支え続け、水害から人々の命と暮らしを守り続けることを、強く願う。